

「希望の島」 作…ポチ子

波の音

男1 「最悪だ」

男2 「それを言うなよ。余計最悪な気分になるだろ。」

男1 「この状況が最悪じゃないっていたら、何が最悪になるんだよ。

乗ってた船が座礁して沈没。次に目が覚めたら、無人島に流れ着いてたなんて……。」

沈黙

女1 「……ほら、そんな暗い顔しないでよ！命があっただけラッ

キーだった訳だし！」

男3 「どっかの話であったよね。無人島に流れ着いた人たちが、生き延びるために仲間の肉を食べ始めたんだけど、仲間の一人がそれを拒絶。そいつの事を心配した仲間が人肉のスープを

ウミガメの……」

女1 「だああ！黙りなさい！」

間

男1 「おい……。あんなところに島があるぞ」

男2 「は？島なんてどこにも無かっただ……。島だ。みんな起きろ！

島があるぞ！」

寝ている女2を揺さぶる

女2 「なによ、騒がしいわね。」

男2 「それが、近くに島があったんだよ」

女2 「幻覚でも見たんじゃない？島が急に現れるわけないでしょ。」

男2 「俺も、船の言い間違いだらって思ったけど、ほんとに島があるんだよ！」

女2 「はあ、一体どこにあるっていう……。ホントじゃない！」

男2 「なあ！」

女1 「あの距離なら、泳いで辿りつけるかも！」

男3 「無理だよ、僕泳げないし。」

男2 「そうか……。よし！置いていこう。」

男1 「おいおい！見捨てる決断が速すぎるだろ！」

男2 「そうか？」

男3 「大体島があったとして、そこに人がいるかどうかも分からないじゃないか。」

男2 「たしかに……。よし、置いていこう。」

男1 「だから待ってって！はあ……。この島には木は沢山あるよ
うだし、イカダなら作れるんじゃないか？」

女2 「木を使うにしたって、ノコギリも何もないのにどうやって木
を切るのよ。」

男2 「たしかに。」

女1 「ああ、それなら任して！はあああ、ていや！」

女1、木をこぶしでなぎ倒す

男2 「前世、蘭姉ちゃんかよ……。」

女1 「なんか言った？」

男2 「いや？」

男1 「とにかく、木は手に入りそうだな。他の材料も各自あつめよ
う。」

女2 「そうね。」

それぞれ作業を始める

女1 「それにしても不思議だよねえ。」

男2 「何が？」

女1 「ここに流れ着いたときは、周りには何もなかったのにさ。突

然島が現れるなんて。」

男1 「霧がかかってたとかで、たまたま見えなかったんだろう。」

女1 「ふーん。」

男1 「ふう。大体こんな感じだな。おい、みんな！イカダが出来たぞ。」

男2 「おっしゃ！これでこの島から脱出できるぞ。」

女2 「・・・ねえ、島ってあんなに近かったかしら？」

男1 「近かったって、島が動くはずないんだから、同じ場所にあるに決まってるんだろ？」

女2 「そうよね・・・。私の勘違いだったみたい。」

女1 「ねえ！」

男1 「次はどうしたんだ？」

女1 「あの島・・・動いてない？」

男1 「なに言ってるんだ、島が動くわけないだろ。」

女1 「でも、ほら。動いてるんだって！」

男1 「疲れて幻覚でも見てるんじゃないのか？」

女1 「ホントなんだって！うしろ！」

男1 「だから、そんなわけないだろ？島が動くなんて・・・。」

男1、後ろを振り向く。

島の形をした巨大な化け物に怯える

男1 「嘘だろ・・・。」

女2 「なによ、この化け物！」

男2 「おい！どうすんだよ。」

男1 「どうするって、逃げるしかないだろ！」

女1 「逃げるってどうやって！」

男2 「みんな！とにかくイカダに乗るんだ！」

男3 「こ、こ、こんな非現実的なことあるわけないじゃないか。こ

れは、げ、幻覚だ。幻覚に違いない。」

男2 「よし、こいつを生贄にして皆で逃げよう！」

男1 「だから、すぐ見捨てるなって！こっちにこい！」

男1、男3の腕を引っ張る。

男1 「みんな、乗ったか！？」

男2・女1・女2 「おう！」「うん！」「ええ！」

男3 「(ぶつぶつ何か言う。)

男1 「よし、行くぞ！」

— 終わり —